

佐渡における病いと「癒し」の考察

91K072 宮澤聡子

1. はじめに

病気になったり怪我をした時、私たちはまず病院へ行く。病院へ行くと医師に診てもらいが、自分の症状とその医師の診断が噛み合うと、それに納得しその症状に見合う薬を貰う。そして不調を感じた時よりも、症状が軽くなったり、身体の調子が良くなると私たちは一般に「治った」という表現を使い、回復を示す。

ところが、病院へ行っても病気や怪我が治らない場合がある。なぜ、自分の病気や怪我が治らないのだろうか、と患者が思うのは当然である。だが患者にとって何よりも辛いのは、治らないことが心の不安となり、重くのしかかることではないだろうか。最近、現代医療でもそういう患者の心と向き合う姿勢が取られつつあるようだが、それでも医療という場が患者の心の中に出来た不安を取り除くには限界があると感じられる。

そういう時に、家族、近所の人、友達、親戚等を通じて現代医療とは異なるカミを拜んで病氣治しをしたり、「癒し」⁽¹⁾ たりする人のことを聞くことがある。本論は、そういう現代医療で治らなかった人々が、伝統医療に行くことによりいかに癒されていったのか、その「癒し」を論じたものである。そういう「治療儀礼は数多くの文化に存在」(上田 1990:176) するが、調査地である佐渡には神懸る時にドンドンと激しく太鼓をたたくので「ドンドコヤ」、その霊能に感嘆して「アリガタヤ」(佐野 1986:850)、「アリマサン」(梅屋 1994b:55) 等と呼ばれている人達がいる。筆者が他に聞いたものには、調査地豊田にはいないが、隣町である畑野町にオイナリサンが、金井町にハッカイサン(八海山)、故ハッコウサン(八光山)⁽²⁾ 等と修行した本山の名称で呼ばれる人達がいる。

「カミと直接に交流する手段をもち、そうした状態のときに治病行為やト占、託宣をする人のことをシャーマン」(佐野 1986:850) と言うのだが、ここで二つ程断りを入れたい。「ドンドコヤ」や「アリガタヤ」は、依頼者に依頼されると初めて行いをする。前述した佐野によれば、佐渡相川町にいる「ドンドコヤ」、「アリマサン」は「神懸る時にドンドンと激しく太鼓をたたき、神と交流することを意図している。しかし相川のみならず、佐渡にいる全ての巫者が神と交流し、祈り、祝詞をあげるとは必ずしも言い難い。また本論は、前述したように「癒し」をテーマにしている。筆者は佐渡島の巫者を依頼者の相談を受入れて、応え、癒す人々と捉えている。従って、佐渡島において「癒し」を行う人々のことを総称し宗教職能者⁽³⁾ と位置づけたい。一方、そこへ行く人は宗教職能者を選び、自から依頼して行くので、語源に基づきクライアント⁽⁴⁾ と呼ぶことにする。

そういう宗教職能者とクライアントの両者の関わりの中から、卒業論文では「癒し」を論じた。そして豊田地区を中心に事例⁽⁵⁾ を取ったが、その中の二例をこの紙面に使いたい。いずれも現代医療では病気と怪我が治らず、宗教職能者の所へ薬にもすがらない思いで行き、明らかに

癒されたと自覚するに至った人々の「癒し」についてである。そのクライアント達がどういうふうに癒されていったのか、また何をもって「癒し」とみなすようになったのか。それをクライアント達の「語り」⁶⁾に重点を置いて、「癒し」を考察することが本論の目的である。まず、調査地となった豊田地区の様子を記述したい。

2. 調査地の概況

われわれ神田ゼミが、佐渡真野町豊田に足を預けたのは1993年8月に始まった。その豊田地区で民俗調査をするために、四泊五日の合宿が行われたのはその時が初めてだった。その後も合宿は四回行われ現在に至るが、四年生は全員、佐渡島の中で卒業論文のテーマを見つけ作成した。本論は、その中でも豊田地区を中心に、フィールドワークを行ったものである。

調査地、佐渡郡真野町豊田は佐渡島の南西部に位置する。世帯数、168軒、人口681人（1994年度）の豊田は大きく農村（山）と漁村（海、町）の二つから成る。「山」と呼ばれる岩野と、「町」の田町、中町、西町の四地区に分かれ、順に32軒、55軒、28軒、58軒となる。豊田がいつからこういう山と海とが一緒になったかは分からない。だが、地域の人によれば昔から農村、漁村がはっきり分かれて「宮（諏訪神社）の上を農家、宮の下を漁業」と、地域の諏訪神社を境とした分け方をされてきた。このように相反する豊田地区は、住む場所も携わる職業も違っていた。そのため、その生活や人々の性格にも差異が表れているのが豊田の特徴である。現在、豊田は第一次産業、第二次産業、第三次産業が揃う地域であるが、生活が豊かになったのは最近のことで、それ以前は働きたくても仕事が無い、子沢山で貧乏な地域だったという。

そういう豊田で、主に農業がなされてきたのは「山」の岩野であった。岩野は、諏訪神社へ向かう坂道を登った所にあり、かつて農業が専業に営まれていた。豊田にはそれほど大きい土地を持つ、大百姓〈ウウビヤクショウ〉はいなかったといわれるが、岩野には「名主」が目立つ。具体的には池田家、大井戸家、中川家、吉田家が挙げられ、小作人に田を作らせていた家もあったという。だが戦後、民主主義により農地解放がなされると誰もが自分の土地を持てるようになった。現在でも岩野では、自分の家で田んぼや畑を持ち、米以外にも白菜、大根、きゅうりなどの野菜や果物（メロン）を作り、自給自足を行っている。だがここ最近では、「土建、公務員が目立ち専業農家は」なく、「朝夕に農仕事をする兼業農家になっている」という。

一方、漁村である町部は隣町の新町側から順に田町、中町、西町となる。家々は真野湾に臨む海と、国道350号線に面してはぼ建てられているが、岩野の広い庭を持った一軒建てと違い、漁村は軒を連ねて建てられているのが特徴だ。もともと中町を通る「中道」が「本通り」であったが、現在のメイン道路である国道350号線が都市計画事業⁷⁾により、街路事業計画として造られるとそれに伴い人家の配置も変わった。以前からあった納屋や蔵を壊したり、家の位置を引き下げたり、反対に土地を購入して家を建てた等、国道拡張工事により、町の家並はほぼ現在の様子に移り変わったらしい。また、真野湾に面している浜通りは元来海で、漁師達は個人の船上げ場に使っていたという。しかし、新潟地震を契機に海の埋立を行い、現在は漁業関連道路として国道に次ぐ道路になっている。

町にある家が70軒ほどだった頃、ほぼ65～66軒が漁師で、主に磯にいる魚をとる「磯漁」⁸⁾がなされてきた。魚を全滅させないようにとの配慮から、錨止めの流し網は禁止されていた。それはこの土地が貧しく、高価なものが使えなかったという理由にもよるらしいが、畑の肥料

に使うイワシをとる時は、流し網を使っていたという。他に、一本釣り（メバル、アジ）、網（フクラゲ）、ヤリ（サザエ）、藁の網等を使い、魚の捕獲が行われていたようだ。こうしてとれた魚について、まだ詳しく分かっていないが、女達がカゴに入れて、馴染み客に売って歩く〈フリウリ〉によりさばかれていたらしい。

機械化された船の使用は、1966年になってからで、それまでは手漕ぎによる近海漁だった。豊田の漁師は戦前まで自分の船に女の人を乗せるのを嫌ったというが、戦時中、男手をとられると女の人も船に乗り始めた。その後、子供が少なくなったり、女の人でも乗りやすくなると、船は叙々に手漕ぎから機械へと変化した。

現在、豊田に広がる真野湾には「新潟県栽培漁業センター」がある。これは国の指定を受けて、1973年に設けられた。資源が減少しているため、センターでは人間の手で魚を育てる漁法（「栽培漁業」）⁽⁹⁾が行なわれている。豊田では主にヒラメの養殖に力が注がれ、今でも海に出て漁をしているが、「とる漁から育てる漁へ」⁽¹⁰⁾と変化しつつある。

かつてその大半が漁師だった町も、近頃は公務員、農協職員、教員あるいは、工場（内藤電誠）に職業を持つようになっていく。そのため、70歳を過ぎた人が今でも漁に出ているという。また、最近では真野湾の合併問題も出ており、豊田の漁業のあり方も変わろうとしている。

豊田の人々が病気になるとまず、病院（現代医療）へ行く。豊田には病院はないため、例えば、風邪を引いたりすると隣の病院へ行くという。新町の森医院（内科）、そして真木山医院（内科、胃腸科）等が挙げられ、豊田の老人から子供まで幅広く利用する。他に高齢者になると完全看護で、付添いが要らない国立佐渡寮養所に行く。普段から行っていれば、何かあった時はすぐ入院させてくれるからだ。しかし重い症状になると、設備の整った佐渡総合病院へ行く人は少なくない。

他に、富山の葉売り、民間療法で知られる薬草（センウリ〔腹痛〕、ドクダミ〔健康維持〕、ゲンノショウコや松の葉っぱ、ドンバコ〔オオバコ〕、ドクマク、タンポポ、柿の葉等）を利用する。また「梨ノ木地藏」という地藏信仰がある。子供の病気や健康を祈願するお地藏さんだというのが、死んだ子の供養、子宝や、大人の病気治癒を願っても叶えてくれるため、「アラタカナお地藏さん」と言われている。毎年8月23日にオコモリ、翌24日のお祭りには佐渡中だけでなく、全国各地から参拝者が集まるので座れなくなる程だという。人々は自分の願いを言い、それが叶うと必ずご報告に来ることを約束する。また白いタスキに、何年何月何日何歳で来たかを書き置きし、祈願をそこに込める。

けれども健康を損なったり、何か異変があると豊田の人々はドンドコヤの所に行くという。しかしそれは豊田においては、こうしたドンドコヤを訪れるのは、以下の説明とはまた異なるようだ。例えば、波平によれば「四国・谷の木ムラ」の人々は、病気は「さまざまな種類のカミヤ死霊や生霊の『タタリ』や『ツキ』によって」（波平 1993[1984]:187-188）なる、そういう観念を持つという。また、同じ佐渡島の黒森地区（仮称）の調査者、中西はその地域に「憑きもの現象」というものがあり、人々は「不幸や災い・病気などの原因を何らかの超自然的要因（例えばムジナ）⁽¹¹⁾」（中西 1993a:15）に結び付けると述べている。これら二地域に比べると、豊田でそういう病気の説明のされ方は少ない。しかし、「医者に行ってもなかなか病気が治らないと、何かサワッテいるのではないか」と考える。そしてそういう時になると宗教職能者の所へ行き、みてもらう。たいてい親（母親）や世間、近所の人、親戚、友達などに宗教職能者を教えられたという。

豊田では村落内結婚が多く（1947年まで）、同地域に実家や親戚があり、その人間関係は密接である。また、昔から漁師が多く信仰に厚い豊田では、行事等の当番に当たると親戚中で手伝い、常に実家や親戚等と身近な関わりがあった。ドンドコヤをはじめ宗教職能者たちは、何らかの時にそういう人々の口を通して伝えられていたようである。

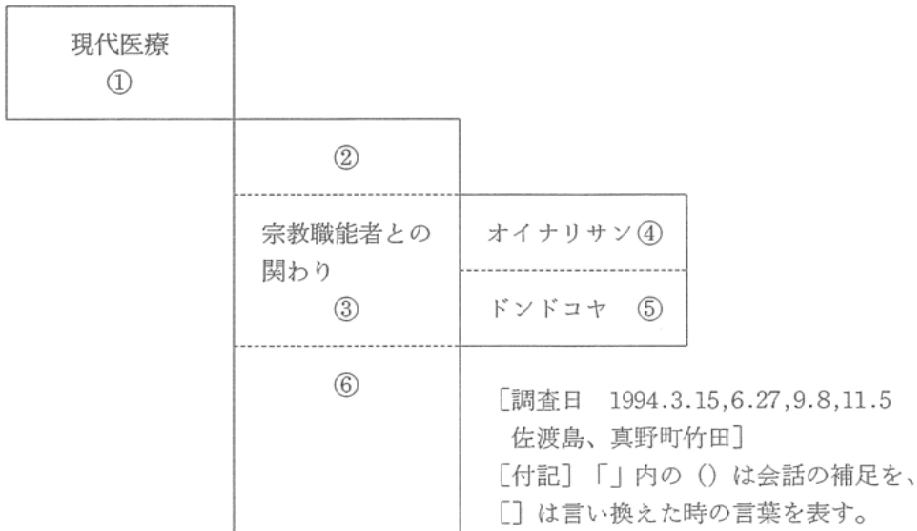
3. 佐渡の調査地における病いと「癒し」

1. 考察—「癒し」の構造 その1

今から事例に挙げるクライアント達も、そういうふうにして宗教職能者を知り、拠り所にした人達だった。一つはSさん（仮名）という1940年（昭和15年）生まれの女性である。オジイチャン（嫁ぎ先の舅）はもともと病気がちで入院と退院を繰り返してしたが、病状が悪化したので病院へ行った。しかし症状が良くならなかったため、宗教職能者の所へ行ったというもの。もう一例、Mさん（仮名、女性）という1925年（大正14年）生まれの場合、自転車に乗っていて転んだ時に、背骨を痛めた。その後一年間、Mさんは病院へ通う。だが背中の中苦痛は治らず、宗教職能者のことを聞いてみてもらった。

これが宗教職能者の所へ行った理由だったが、二つの事例に共通していることがある。それは彼らには心の重荷があったが、宗教職能者の所へ行くことにより、または、行った後の「語り」をみると、クライアント達がプラス思考になっていることである。つまり、そういうことが「癒し」なのではないだろうか、と考えられる。もしそうであるのなら、彼らは癒されたのだと思われる。しかし背負っていた心の重荷が、プラス思考に転換される、のにいかなることが起因したのか。SさんとMさんの「語り」を元に、図に描いて考察したい。なお、図は時間的な配分を考慮していない。

【事例1】〈Sさんの場合〉 女性、1940年（昭和15年）生まれ

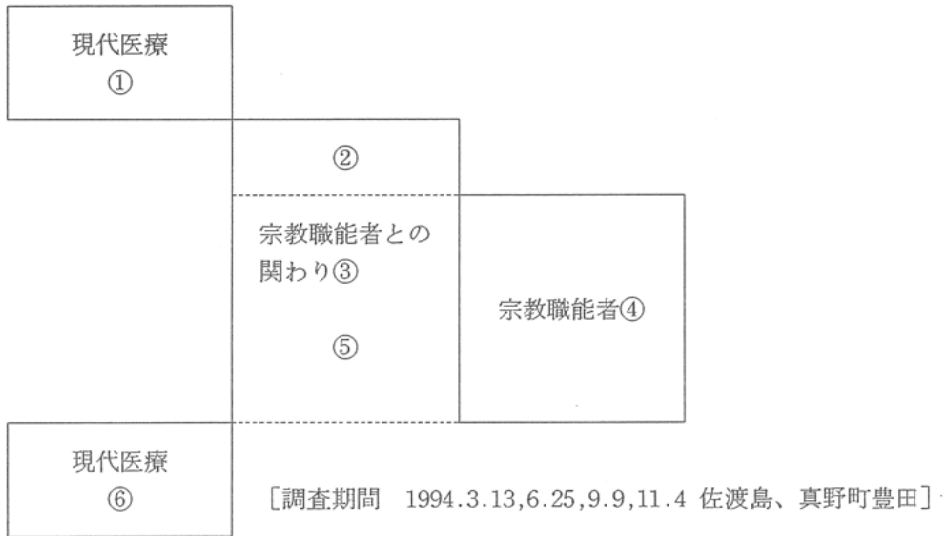


- ①・オジイチャンは、もともと病気がちだった。手術をして、痛みを知っていたし、胃と腸を取っていた。病気が悪化した時、「自分はもう、だめだ、ガンなんだ」と思い、生きる気力をなくした。病院に行くのも嫌がり、薬も飲まなくなったし、時々、お漏らしをすることもあり、Sさんの手がかかっていた。
- ・国立佐渡療養所に二十日間、入院したこともあるが、オジイチャンは良くならなかった。その症状に対し、医者もおかしいなあ、と首を傾げた。
- ②・そういう時、近所に住むオバアチャンが、誰かがSさんの家に呪いをかけているようなことを教えてくれた。
- ・だから、何か聞いて禊ってもらうしかなかった、とSさんは言う。
 - ・そして近所のオバアチャンからオイナリサン（畑野町）の所へ連れて行ってもらった。
- ③・（オイナリサンに依頼した）
- ④〔オイナリサン、ドンドコヤに言われたこと〕
- ・オイナリサンにみてもらおうと、呪いをかけている人がいた。
 - ・「お前の所は栄える、ケナルイ〔羨ましい〕、お前の所はもっと悪くなれ」と、呪いをかけた人物に似た声でオイナリサンの口から出てきた。
 - ・それを祓うため、お祓いの時に「呪いをかけた人物に負けないで言い返さないといけない。強く答えないといけない。でないと、呪いが戻ってきてしまう」とオイナリサンに言われ、Sさんは負けずに言い返した。
 - ・その後のオイナリサンの説明は「呪っている人がムジナに頼んで（呪いを）かけているのだから、呪っている所（国府の竹本さん）へ行っても、ムジナに油揚げを進ぜなさい」といわれた。
 - ・また、オイナリサンからは御守りを貰った。その御守りでオジイサンの体を拭くと病気が治るから、拭いた後は川に流すように、といわれた。
- ⑤・その後、金井町のドンドコヤが「良く当たる」と近所のオバアチャンが言うので、そこにも行った。金井のドンドコヤもオイナリサンと同じことを言った。
- ⑥〔Sさんの行動〕
- ・国府にある竹本さんのムジナに油揚げを進せた。
 - ・貰った御守りでオジイチャンの身体を拭いて、川に捨てた。

[その後]

以上をやり終えた辺りから、Sさんは「気分的に良くなった」という。また、Sさんがみる限り、オジイチャンは良くなったような気になった。オジイチャンの現状維持をただけで、病気を治す所まではいかなかった。けれども、オジイチャンは元気になった。つまり、どうにか自分で何かができるようになり、Sさんの手もかからなくなった。

【事例2】〈Mさんの場合〉 女性、1925年（大正14年）生まれ



- ①・Mさんが自転車で転んだ時に背骨を痛め、一年間病院に行ったが治らなかった。
 - ・どここの病院へ行っても、お医者さんには「（Mさんの怪我は）助かる見込みもないから、レントゲンを撮る必要もない」とか、「何でもない」等と、言われるばかりだった。
 - ・死ぬほど背中が痛くて苦しいのに、病院のお医者さん達は診てくれなかった。
 - ・佐渡総合病院には二年間、通った。医師の診断では「もうすぐ死ぬ」と言われたが、いつになっても死ななかった。
 - ②・Mさんは当時、土方をしていた。その時の仕事仲間（女性）が、家の近くにドンドコヤがあることから、Mさんにそこを教えた。それで畑野町のドンドコヤへ行った。
 - ③（ドンドコヤの所へ行き、みてもらう）
 - ④〔ドンドコヤの言ったこと〕
 - ・「今の所〔病院〕は、曇っていてだめだ。今、懸っている（病院よりも）前に良い所があるから、（そこへ）行け。一つ手前（の病院）なら、治る。（そこは）透き通っていて、きれいだ。ここは良い、治る」
 - ⑤・それを聞いた時Mさんは、自分の気持ちにピッタリ合ったと言う。
 - ⑥・Mさんは樺太から越してきたばかりで、しばらくは外に出なかった。だが、言われた通りに行ってみると、本当に病院〔整骨院〕があった。
 - ・中に入ると、そこの先生はMさんの身体に触れて診断した。身体を前に曲げたり、反らせたりして診た。その結果、実際に背骨は曲がっていて、Mさんの心臓を圧迫していた。
 - ・整骨院の先生は「かわいそうだったな。（今まで懸った）病院の先生はヤボだったな」と、Mさんの気持ちを分かってくれた。
- [その後（⑥以降）]
- ・その後、四回くらい通ったら治った。ぐんぐん治った。
 - ・「（私の怪我は）身体に傷のないものだから、分かりにくいものだった（と思う）。だけ

ど、病院の先生はチャラクレ（曖昧）だ。先生の勘違いがあるから、（診断する）先生によって（診断が）違う。自分の気持ちが合わないと治らない」

以上が、SさんとMさんの「語り」、および宗教職能者を頼った経緯だった。彼らの「癒し」について考察するために最初に戻ってみたい。

2. 考察—「癒し」の構造 その2

Sさんが宗教職能者の所へ行った要因は、①の部分であった。第一に、オジイチャンが「自分はガンなんだ」、と思い気弱になったこと。第二に、医師もその症状に首を傾げたこと。そして第三に、誰かがSさんの家に呪いをかけている、と近所のオバアチャンが教えてくれたことが挙げられる。事の始まりはオジイチャンの病気が悪化したことであった。しかし、種々なことが複雑に重なり合っていたのである。病いの当事者はあくまでオジイチャンであり、Sさんではなかった。だがSさん自身の心の中に、それは重荷となって存在していたのではないか。

その結果Sさんは、近所のオバアチャンにオイナリサンの所へ連れて行ってもらっている。「本当に困った時にだけ行った」し、「困る時にそういうことをする」と、Sさんは言う（②）。そしてSさんが「気分的に良くなった」のは「（オイナリサンや金井のドンドコヤから）祈禱をしてもらって（④、⑤）、それら〔竹本さんの所にあるムジナに、油揚げを進ぜたり（⑥）、貰った御守りで、オジイチャンの体を拭いて川に流す（⑥）等〕をやり終える時。そして効果が出てくると、ああ、効いたかな、という風に思う。祈禱をやってもらおうと、自分で考えて少しは良くなったかな、と思う」（⑥以降）。つまり、心の重荷（①）とプラス思考（⑥以降）の間というのは今、段階を踏んで述べてきた①～⑥の部分なのではないだろうか。

しかしSさん一人で、良い方向に考えを向けるようになったのではない。図にもあるように、Sさんは宗教職能者との関わりをもっている（④、⑤）。その宗教職能者に関してSさんは、「すぎる所」と言っている。それは「その人（オイナリサンや金井町のドンドコヤ）を信用していないと、そんなことできない〔すぎることなんてできない〕」。別の時にも、「迷信だといいいながらも、人間は何かにすぎる。例えば、ホトケオロシをやったり……。体の丈夫な人は（占い等を）迷信だという（けれど……）」。

Sさんは信者ではないが、オイナリサンやドンドコヤに「すぎ」った。それには「信用していないと（そんなことできない）」のである。宗教職能者の説明には、「自然に（略）ああ、そうかと思う」、「期待外れなことはない」と話している。Sさんは宗教職能者を信じ、信頼関係というつながりにより気持ちに余裕が出てきたのではないか。そこに至るまでには宗教職能者の存在が必要だったのである。

他方、Mさんの場合は背中への苦痛が治らなかつたこと。お医者さんの診断と自分の痛みが噛み合わないことや、診断してもらえなかつたことが心の悩みとなっていた（①）。しかし、仕事仲間によりドンドコヤをすすめられ（②）、Mさんはそこへ行く（③）。するとドンドコヤに「今の所は曇っていてだめだ。今、懸っているよりも前に、良い所があるからそこへ行け。一つ手前なら、治る」と言われる（④）。それが「自分の気持ちとピッタリ合」い心の重荷もとれ（⑤）、Mさんの発達はプラス思考に変わったのである。

ドンドコヤはMさんの怪我を直接治したのではなかった。けれども、ドンドコヤの説明を聞いて、Mさんは癒されたのである。また、紹介された病院の先生から納得いく診察をしてもらい、Mさんの怪我はぐんぐん良くなったという(⑥)。①～⑤ないしは①～⑥を通して、Mさんはプラス思考になっている。そして「自分の気持ちとピッタリ合った」とあるように、ドンドコヤを信じ、その関わりがあって癒されたのではないか、と感ぜられる。

4. 結び

SさんとMさんには、それぞれ困り事があった。しかし段階を踏みながら、プラスで物事を考えていくようになった。つまり、そういう発想の転換がなされることが「癒し」なのではないか、と上述した。それはクライアントが自分自身の思考の中で、どこまで病いの溝を埋めることができるのか、ということなのではないだろうか。現代医療で治らなかった病気が、伝統医療でも治らないことをクライアント達は知っている。事実、Sさんの場合、オジイチャンの病気は治ったわけではなかった。しかし、オジイチャンが自分で何かができるようになることをもって、Sさんは「癒された」と認めたのである。Sさん自身、宗教職能者の所に行くのは迷信なのかもしれないと言っている。でも、自分はそれを信じたし、オジイチャンが良くなるように必死に願った。そして「それで良かったと思う」、「気分的にスッキリした」と話している。クライアント達は病気が治らなくても、置かれた事実に納得出来ているのである。

それには、宗教職能者という「癒し」のきっかけを作ってくれる人物がいた。豊田の人々が「よく当たるカミサンだ」と聞くと、そこを選んで行くように、クライアントが癒されたと考えるに至るまでには、ある程度宗教職能者の能力がかかっている。しかし、宗教職能者はあくまで「癒し」のきっかけを作る人である。クライアントの心の重荷がプラス思考へ変わる空間は、クライアントが自ら動いて埋めなければならないのである。それは、クライアントが一人々々行うので、それぞれに異なる。だが、SさんもMさんもそこを埋めることができた。宗教職能者を信じ、その彼らとの信頼関係により癒されていったのである。

癒される、ということはクライアントが宗教職能者の所へ行ってみようかな、と思った時からすでに始まっている。われわれは病気になったり、怪我をしたりすると、まず病院へ行く。しかし、病院へ行っても彼らが治らない場合がある。そうなるとなぜ、自分の病気(怪我)は治らないのだろうか、と思う。だが、医療はそれに応えてはくれない。そうすると人々は「何かがサワッているのかもしれない」と考え始める。そういう時に、家族、近所の人、友人、親戚の人に話したり、相談などした際、宗教職能者のことを口伝えて聞いたりする。そして現代医療とは異なる、普段は触れ合うことのない、あるいは考える必要などない伝統医療(宗教職能者)へ行こうとなる。

クライアントがそこへ行くと、宗教職能者は彼らの依頼を受け入れる。そしてカミを拜んでトイギキをするが、カミのお告げを受け取ると、それをクライアントにそのまま伝える。同時に、クライアントが背負い込んだ悩みに助言を与えたりもする。だが、宗教職能者は単にカミを拜むだけではないし、それを伝えるだけでもない。彼らはクライアントの話、例えば話してもどう仕様もないことや、あるいは誰も聞いてくれない嘆きや愚痴を話しても向き合ってくれる、耳を傾けてくれるそういう人なのである。

なぜ、クライアントが宗教職能者を選んだのか、そこへ行こうという気持ちになったのかと

言えば、彼らはクライアントの依頼に応えるだけでなく、愚痴や悩みをも聞いてくれるからではないかだろうか。例えば、筆者が宗教職能者Wから聞き書きを取っていた時のことである。その日、Wに予約を入れていたオバアサンがやって来ると、筆者のフィールドワークは中断した。だが、様子を伺っているとそのオバアサンは「〇〇で困っているから拜んでください」ではなく、最初からWに自分の愚痴を延々と話し出したのである。

また、同じくWの所での話である。あるオバアサンがみてもらう番になった時、Wとその人は仲良く世間話をし始めたのである。そしてそれに一区切りつくとオバアサンが頼んだことを拝み始めていた。もっとも、このオバアサン達はWとは親しいらしい。そういう二人のように愚痴や世間話を宗教職能者と出来るようになるには、信者や常連客のようにしばしばそこへ行くようなくらいでなければならないだろう。だが、宗教職能者が現代医療と違うのはその間ではないだろうか。

—「(病気は) 医者だけでは治らない。(略、自分の) 気持ちとピッタリ合わないため」
(Inf .M)

—「病院の先生はチャラクレ〔曖昧〕だ。先生の勘違いがあるから(診断してくれる) 先生によって、(診断が) 違う。自分の気持ちが合わない治らない」
(Inf .M)

宗教職能者の言った助言が、クライアント自身の気持ちに合うと感ずることがあるという。それはたまたまなのかもしれない。だが、それが「合う」と感ずることでクライアントは癒されるのであるし、合わなければ癒されないのである。「当たった」というのは、宗教職能者の話すことが、クライアントに受け入れられるものなのか、どうなのか、なのではないだろうか。そして癒されたと自覚した人々は、今度はかつて自分がそうであったように、病いに悩む人たちに宗教職能者を教える側の人となる。つまり、同じように口伝えをしていくのである。だが、クライアントの気持ちに合わない時、「癒されない限りは何らかの行為を呼び起こし続ける」(波平 1990:vi) のである。クライアントが使う「当たる」、「当たらない」ということは、「癒し」の中の行いであるとともに、それを判断するものでもある。

[付記・謝辞] 本論文は、1994年12月に敬和学園大学に提出した卒業論文を元に、加筆・訂正をしたものである。お話を聞かせてくださった佐渡真野町豊田の方々、Sさん、Mさん、オイナリサンには調査ではお世話になりました。また、フィールドワークから、卒業論文作成、論文提出後まで敬和学園大学神田より子助教授には、ご指導を頂いた。神田ゼミ主催、卒業論文発表会後に貴重な助言をしてくださった新潟県民俗学会の鶴巻さん、鈴木秋彦さん、参照文献および論文の枠組みにアドバイスをくださった慶應義塾大学大学院生の梅屋潔さん、そして一緒に学んだ神田ゼミの四年生、三年生の皆さんに深く感謝致します。

註

- (1) 波平(1990:vii-viii) 参照。
- (2) 豊田地区のインフォーマント、Aさん(仮名)によれば、金井町の巫者「ハッコウサン」(八光山、金井町)は、1994年8月17日にお亡くなりになったという。
- (3) 波平(1993[1984]:73) 参照。なお、聞き書きしたオイナリサン(畑野町、1915年

〔大正4年〕生まれ、女性）は、佐渡島の宗教職能者の代表として捉えている。文中で宗教職能者に関する内容は、オイナリサンから聞いたものを中心に記述した。また、所により宗教職能者Wと仮名を使用している。

- (4) 松岡 (1990:263-296) 参照。他に、THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY SECOND EDITION Prepared by J.A.SIMPSON and E.S.C.WEINER CLALENDON PRESS・OXFORD 1989 VOLUME II cham-creeky p.320, “clintele 2.A body of clients or dependants; all who are under the patronage and protection of any person :a body of professed adhelents; a following .” 参照。筆者が文中で依頼者（人）と記す場合は全て、クライアントと統一した。本論文におけるクライアントとは、かつて何らかの理由により宗教職能者を頼ったことのある人々のことである。本論、および、卒業論文（1994）で扱った事例の方々は全て、クライアントである。
- (5) 本論、そして卒業論文（1994）で使用した事例のことである。卒業論文では、神田ゼミのゼミ生と筆者によって集められた事例12例を使い、「癒し」の考察を行った。本論ではその中でももっとも癒された、と感じられる2例を提示した。事例の詳細は宮澤聡子 1994 卒業論文 「佐渡における病いと『癒し』の考察」pp.18-31 に記述してある。
- (6) 浜本 満 (1993:14) 参照。クライアントがいかなるふうに癒されていったのか、その過程をみるため、クライアントの「語り」に沿って分析し、考察した。
- (7) 「わたしたちの真野町」編集委員会 (1985[1983]:54-58) 参照。
- (8) 真野史編纂委員会町 (1976:359) 参照。
- (9) 「わたしたちの真野町」編集委員会 (1985[1983]:50-52) 参照。
- (10) 「わたしたちの真野町」編集委員会前掲書
- (11) 中西 (1993a:15) 参照。 () 内の補足は、宮澤によるものである。

参考文献

- 波平恵美子 1993[1984] 『病気と治療の文化人類学』海鳴社
——— 1990 「序文」波平恵美子編著『病むことの文化：医療人類学のフロンティア』pp.v-viii, 海鳴社
上田紀行 1990 「イメージの治癒力：治療儀礼と深層のネットワーク」波平恵美子編著『病むことの文化：医療人類学のフロンティア』pp.263-296, 海鳴社
佐野賢治 1986 「巫女とムジナつき」相川町史編纂委員会『佐渡相川の歴史資料集8』p.p.850-880, 新潟県佐渡郡相川町
梅屋 潔 1994 「邪まな祈り：新潟県佐渡島における呪詛」『民族学研究』59巻1号pp.54-65
松岡悦子 1990 「キツネつきをめぐる解釈：メタファーとしての病い」波平恵美子編著『病むことの文化：医療人類学のフロンティア』pp.263-296, 海鳴社
THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY SECOND EDITION Prepared by J.A.SIMPSON and E.S.C. WEINER CLALENDON PRESS・OXFORD 1989 VOLUME II p.320.
浜本 満 1993 「ドゥルマの占いにおける説明モード」『民族学研究』58(1) pp.1-24.
「わたしたちの真野町」編集委員会 1985[1983] 『わたしたちの真野町』真野町真野町教

育委員会

真野町史編纂委員会 1976 『真野町史上巻』 pp.358-373, 真野町教育委員会

中西裕二 1993 a 「新潟県佐渡における憑きもの現象(1)」『福岡大学人文論叢』第24
巻4号, pp.1035-1053

宮澤聡子 1994 卒業論文「佐渡における病いと『癒し』の考察」未刊

(卒論指導 神田より子助教授)